

Program Note

■F. リスト(1811-1886) : 2つの演奏会練習曲より「小人の踊り」 S. 145/R. 6

軽やかな妖精の舞いを想像させる小人達の姿。恥ずかしがり屋な小人、自由奔放な小人、悪魔的な小人…軽妙な筆致で描かれたファンタジー溢れる作品です。第1曲目の「森のささやき」と一対の形で作曲されたものが、2曲目の「小人の踊り」です。(宮崎 紗耶子)

■F. リスト(1811-1886) : メフィスト・ワルツ第1番「村の居酒屋での踊り」 S. 514/R. 181

詩人レーナウによる叙事詩「ファウスト」(神と人生に対する懐疑と絶望を詠っている)から靈感を得て作曲されました。

「ファウストがメフィスト(悪魔)に連れられて村の酒場へやってくる。楽士からヴァイオリンを取り上げ、憑りつかれたかのように弾き始め、農民たちを陶酔のなかに引き込む。ファウストは意中の娘を星の夜へと誘い、森の中に入っていく。」

この作品の物語にある‘狂喜乱舞’の凄まじいエネルギーに負けないよう、いつも背中を押してくれる先生方に感謝の気持ちを込めて。(宮崎 紗耶子)

■C. ドビュッシー(1862-1918) : 版画 1. 塔 2. グラナダの夕べ 3. 雨の庭

1903年ドビュッシー41歳の作品。第1曲「塔(パゴダ)」ではインドネシア・ジャワのガムラン音楽(銅鑼や鍵盤打楽器のいろいろな鐘の音色)、第2曲「グラナダの夕べ」ではスペイン・グラナダ…夕日に染まったアルハンブラ宮殿、けだるいハバネラのリズムやギター、フラメンコのカスターネットの音色とともに夜が更けていく…、そして第3曲「雨の庭」では“ねんねよ坊や”“もう森へは行かない”の2つの童謡の聴こえるパリ、と、3曲を通して全く違う風景、音、匂い、空気が漂います。ドビュッシーは主題だけでなく、リズムや和声を組み合わせた独自の対位法を生み出し、自身では訪れたことのない各地を表現しました。

本日、このプログラムノートと一緒にお入れしております“館ムジカ10年の歩み”の、一番初めのコンサートで繁先生がソロでお弾きになったのがこの『版画』でした。(伏見 姿)

■F. ショパン(1810-1849) : マズルカ Op. 68-1 ハ長調, Op. 68-2 イ短調

Op. 68はショパンの死後1855年に出版された遺作。本日演奏する1番ハ長調は1829-30年頃、2番イ短調は1827年頃作曲された。マズル風序奏から明るいオベレク、マズルと続く1番はとても清々しく活力溢れる。2番イ短調はメランコリックなクヤヴィヤクと中間部イ長調のマズルとの対比が印象的で美しく、若干17歳で作られたことに驚愕する。(坂本 知穂)

■F. ショパン(1810-1849) : ファンタジー Op. 49 ヘ短調

1841年作曲、出版。多くの傑作が生み出された円熟期に差し掛かる31歳頃の名作。ヘ短調に始まり変イ長調で終わる。形式にとらわれず楽想が自由に羽ばたく「ファンタジー(幻想曲)」。出だしこそ足取り重い序奏だがそこから豊かな変化を続け、終わりは華々しく愛情深く、凜として気高い。この作品に私自身とても支えられた。中間部の祈りようなコラールでは、コロナ禍で弾く私に温かく寄り添い励ましてもらった。先生ご夫妻と会場の皆さまへ感謝を込めて演奏したい。(坂本 知穂)

■R. シューマン(1810-1856) : シンフォニック・エチュード Op. 13 (一部省略)

この曲は1830年パガニーニの演奏に衝撃をうけて1834年頃から書き始められた。変奏曲形式で書かれ、主題は当時の恋人エルネスティーネの父でアマチュア音楽家でもあったフリッケン男爵の作品が用いられている。高度な技巧と変化に富んだ変奏、そしてポリフォニックな書法を駆使して交響的な響きを作り出している。余談だがこの曲は私が日本音コン(毎日コンクール)を受けた際、第2次予選で弾いた、その後の人生を決めるきっかけにもなった曲である。本日は全12曲中第8、9、10曲を割愛して演奏します。(浅野 繁)

■M. ラヴェル(1875-1937) : 左手のためのピアノ協奏曲 ニ長調 (2台ピアノ)

第一次世界大戦で右手を失ったピアニスト、パウル・ヴィトゲンシュタイン(哲学者ヴィトゲンシュタインの兄)の依頼でラヴェルが55歳の時に書き上げた左手のみの協奏曲。

ラヴェルの自筆譜には「ミューズ(女神)たちの戯れ」とあるが、左手のみとは思えない美しい多声音楽と超絶技巧。胸に沁みる主題と圧巻のカデンツァ。ラヴェル晩年の精神性が色濃く感じられる作品になっている。余談だが、あまりに作品の高度なテクニックに、ヴィトゲンシュタインは楽譜を改ざんして演奏したところ、ラヴェルと陰悪になったという逸話がある。

館ムジカ10年の歩みの先に辿り着いた作品です。ご一緒下さる渡邊真司さんに心より感謝致します。

(浅野 純子)

■C. サン = サーンズ(1835-1921) : ベートーヴェンの主題による変奏曲 Op. 35 (2台ピアノ)

この作品は、序奏、主題、8つの変奏曲、フーガから成り、1874年に作曲された。

主題はベートーヴェンのピアノソナタ第18番 op. 31-3の第3楽章メヌエットのトリオの部分を用いている。8つの変奏曲の中でも、第4、6変奏は2人が交互に演奏して1つのメロディーを組み立てるので、呼吸が合わない曲が破綻してしまうスリリングなところが面白い。第7変奏の葬送行進曲を経て再び変ホ長調に回帰し、壮大なフーガの織り成すフィナーレへと向かう。変ホ長調は、ベートーヴェンの交響曲「英雄」やピアノ協奏曲「皇帝」に象徴されるように、華やかで生命力に溢れていて、この作品も本日の「祝典」に相応しい曲と言えよう。(海鋒 美由紀)